集落形成・生業・地域行事からみた石垣島集落における地域住民の空間認識の特徴

山本 奏音（東京大学 大学院工学系研究科，yamamoto@keikan.t.u-tokyo.ac.jp）
福島 秀哉（東京大学 大学院工学系研究科，fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp）
渡部 哲史（東京大学 大学院工学系研究科，stswata@hydra.t.u-tokyo.ac.jp）

The characteristics of spatial perception in villages on Ishigaki Island:
From the viewpoint of history, means of livelihood and community events

Kanane Yamamoto (School of Engineering, The University of Tokyo)
Hideya Fukushima (School of Engineering, The University of Tokyo)
Satoshi Watanabe (School of Engineering, The University of Tokyo)

要約

近年、持続可能な観光戦略・地域戦略への見直しの必要性が指摘されている中、島嶼部を訪れる観光客数は増加し、環境、経済（観光）、地域社会のバランスが取れた持続可能な発展が求められている。地域住民の空間認識を通して地域社会の特徴を部分的にでも可視化・共有することは、観光戦略・地域戦略立案と地域社会の関係の議論を進めるにあたって、重要な役割を果たすと考えられるが、十分な知見が蓄積されているとはいえない。本稿では、石垣島の歴史を概観し、特徴の異なる 7 つの集落を対象集落として選定した上で、地域住民の生活空間に対する空間認識、特に基礎的なデータとなる集落の範囲と中心に関する空間認識の特徴を記述し、歴史や生業、地域行事などの地域社会の特徴との関係を把握することを試みた。その結果、地域の範囲の認識における階層的な境界を可視化し、その要因が地形、居住範囲、生業・土地利用、信仰、集落の境 5 つに大別できることを示した。また、地域の中心に関する空間認識から、地域行事の運営を担うコミュニティの単位や関連する各施設の場所性との関係性を指摘した。

キーワード

石垣島，集落，環境認識，サインマップ法，地域戦略

1. はじめに

1.1 背景・目的

近年、地域の固有性、多様性をいかした地域づくりの重要性が高まってきている（国土交通省，2014）。一方でインバウンド需要の高まりやそれに対応したインフラ整備により観光客が急増した地域では、環境へのインパクトの軽減や地域の歴史・生活文化の保全・継承と、観光開発の両立による、環境、経済、社会のバランスが取れた持続可能な観光戦略・地域戦略への見直しの必要性が指摘されている（観光庁，2018）。

しかし学術分野において、環境、経済などの定量的データを得やすい指標に比べ、生活様式の変化や観光開発の影響を受け急速に変化している地域社会の特徴を読み取る分析手法や、その結果を計画に反映するための知見は十分蓄積されていない。また実践においても、伝建地区や文化的景観、世界遺産等に選定され保全計画が進められているような従来の特徴を継承している一部の地域と比較して、急速に変化した地域社会の特徴を適切に評価し、観光戦略・地域戦略に関する上位計画へ反映している例は少ない。

人文地理学や民俗学の村落空間論において、農山漁村のような集落の生業や信仰等に関わる地域社会の特徴の一部は、地域住民の空間認識に表象されることが指摘されている（福田，1980；今里，2006）。さらに地域住民の空間認識に関連して、住民が意味付ける基礎的な空間単位やその構造のあり方、外部からの影響の受け方など、地域社会の特徴の理解に向けた研究上の課題が示されてきた。地域住民の空間認識を通して地域社会の特徴を部分的にでも可視化、共有することは、多様なステークホルダーの協働により将来の観光戦略・地域戦略立案の議論を進めるにあたって、重要な役割を果たすと考えられる。しかし上記分野においても高度経済成長期以降の集落の変貌に理論的枠組みが追いつかず研究量が減少するなど（市川，2001）、近年急激に変化した地域における地域住民の空間認識のあり方に関して研究の蓄積が十分とはいえない。

本研究の対象地である石垣島は日本最西端に位置する八重山諸島の主島である。石垣島は、世界的なアイランド・ツーリズムの需要や、2013 年新石垣空港の整備により、八重山諸島各島へのアクセスの基点として利用され、近年では年間 100 万人を超える観光客が訪れる。

この急激な観光開発が環境や地域社会へ与える影響は大きく、石垣島では環境、経済（観光）、社会のバランスが取れた、持続可能な発展に資する観光戦略・地域戦略の立案、およびその達成に向けた指標の提案が急務である。特に地域社会の特徴に考慮した観光戦略・地域戦略の立案は、各集落の形成過程や現在の生業やコミュニティ

活動の特徴が多様な石垣島において、島文化の継承、地域づくりの主体性の醸成等に向けた重要な観点である。しかし石垣島に点在し地域社会の基礎単位である各集落は、近世から発展した集落、戦前・戦後の計画移民集落、自由移民集落など多様な背景を有しており、生業においても農業を基盤に発展しながらも近年観光化の影響を受け、それに伴い移住者が増加するなど、生活文化・社会環境を取り巻く状況は複雑であり、地域社会の特徴の総体は可視化・共有されていない。そのため観光開発により無自覚なまま衰退・消失される可能性が高いという点で地域における危機といえる。しかし各集落の状況を踏まえた地域社会の特徴の把握は地域住民への丁寧なアプローチが必要となるなど研究・実践上の課題が多い。

伝統的な集落では、地域の範囲（境界）や集落の中心に関する空間認識において、生業や信仰、地域活動の社会的単位等に関連する地域社会の特徴が表れることが指摘されている（福田，1980；市川，2001）。本稿では、石垣島の集落群形成に関連する特徴を有する 7 集落を選定し、地域住民が捉える地域の範囲（境界）や集落の中心の空間分布とその要因を記述し、集落形成の歴史的経緯、生業、コミュニティ活動等の特徴等との関係を分析することで、上記危機の克服に向けた今後の研究の展開の基礎となるデータの取得を目指す。また当然新たに移住してきた住民と、公民館等に所属し地域運営を担う住民とではその空間認識が異なる特徴を持つ可能性が高い。本稿では今後の研究の展開の基礎となるデータを取得するという目的から、多様なステークホルダー間の比較分析に先立ち、地域運営を担う公民館の関係者を中心とする地域住民の空間認識の特徴を整理する。

以上より本稿では、石垣島の特徴を概観した上で対象集落として 7 集落を選定し、集落形成の歴史的経緯、生業、コミュニティ活動等の特徴を整理し、各集落の地域運営を担う地域住民を中心にその空間認識の特徴を記述することを目的とする。さらに空間認識の特徴を通して地域社会の特徴の考察を試みる。

1.2 既往研究と本研究の位置付け

民俗学、人文地理学などの豊富な研究成果に加えて、生活空間の特徴と計画分野への適用を視野に入れた集落研究は、近代都市計画論への反省を背景に、1970 年代頃より建築や造園などの分野において本格的に行われ、現在までに多くの蓄積がある（重村・山崎，1991；山崎・重村，1993 など）。これらの研究は、共同性の空間構造を明らかにするとともに、高度経済成長期以降の変化に一定の法則性があることを示し、そのモデルの有効性を示しており、その中で地域住民の空間認識は重要な要素の 1 つとして扱われている。またサインマップ法等により直接的に空間認識を把握した研究もある（伊藤，1985 など）。その後も、伝建地区や世界遺産、文化的景観等に選定された対象地を中心に、建造物群や景観の適切な保存･保全･活用を目的とし地域社会に関する研究が重ねられた（麻生他，2009 など）。沖縄県においては竹富島の伝統的建造物群保存地区にて、景観を維持する地域社会のシステムを明らかにした研究などがある（高口他，2000）。本研究の特徴は、同じく地域社会の特徴の解明と地域づくりへの寄与を目的としつつ、地域住民の空間認識を通して多様な集落の地域社会の特徴の総体的把握への展開を試みる点にある。

地域に関する認識とそれを構成する要因との関係分析は、近年では地域愛着等に関する研究の中で多くの蓄積がある（Lewikca, 2005 など）。ただし地域愛着を取り扱った研究の多くは同規定因を地域住民の地域に対する評価（引地ら，2009）といった間接的な指標、あるいは職業や年齢（Hidalgo and Hernandez, 2001）、学歴（Lewikca, 2005）といった地域住民の個人属性に求めており、地域戦略や諸計画の前提となる空間的特徴と関連した地域社会の特徴を直接取り扱った研究は散見される程度である。Zhou et al.（2015）は、地域愛着と空間的特徴の歴史性の関連性に着目し研究成果を報告しているが、同関連性は限定的である。

本研究の特徴は、対象は限定的ながら、多様な地域性を持つ複数集落の地域住民の集落の範囲と中心に関する空間認識から、集落形成の歴史を踏まえた地域社会の特徴との関係性の分析を試みる点にある。

石垣、八重山地域に関する主な既往研究としては、マラリア（千葉，1972）や遠距離通耕（浮田，1974）など石垣島の歴史上重要な特徴について研究した研究、戦後開拓移民の動向について述べた研究（石原・安仁屋，1978）などがある。また近年の移住者の実態を調査した研究がある（柴田，2015；羽柴他，2018）。集落空間の歴史性を考察した研究としては、鎌田他（2012）が、明治 20 ～ 30 年頃の地積図を参考に集落空間の変遷を明らかにしている。

1.3 研究手法

本研究は、以下の手順でおこなった。後述する対象集落選定においては、近世以前から形成された集落、自由移民集落、戦前の沖縄振興 15 カ年計画による計画移民集落、戦後の計画移民集落といった集落起源・集落形成の背景に加え、位置、生業、行事・地域活動などの特徴を考慮して候補を選定した上で、公民館を通して調査協力が得られた 7 集落を対象とした。

次に文献調査および補足的なヒアリング調査により、集落空間の特徴に着目して各集落の概要を整理した（2 章）。さらに各集落の地域運営を中心的に担っている公民館関係者を中心に、アンケート方式によるサインマップ法を実施して住民の空間認識を記述し、2 章の成果と比較することでその特徴と要因を分析した（3 章）。用いた対象集落に関わる主な文献資料（表 1）、ヒアリング実施概要（表 2）、アンケート実施概要（表 3）を示す。

2. 石垣島と対象集落の概要

2.1 石垣島の概要

石垣島の集落位置を図 1 に、歴史の概要を表 4 に示す。

表 1：各対象集落の主な文献資料

対象集落	各対象集落の主な文献資料
登野城	牧野清（1975）．登野城村の歴史と民俗
宮良	宮良村誌編集委員会（1986）．宮良村誌
白保	得能壽美（2009）．古文書に見える白保村夏花・白保村ゆらてぃく憲章推進委員会（2015）．白保公民館指定文化財ガイドブック
名蔵	名蔵入植 50 周年記念事業期成会（1999）．名蔵入植 50 周年記念誌―自由移民の歩み―
川原	記念誌編集委員会（1991）．川原入植五十周年記念誌
米原	石垣市米原入植 50 周年記念誌編集委員会(2002)．石垣市米原入植 50 周年記念誌　開拓の魂
伊原間	伊原間公民館編（1993）．伊原間村誌

表 2：ヒアリング概要

No.	実施日	対象者	内容
1	2018/10/23	石垣市職員 A，B	石垣市の観光戦略、集落状況
2	2018/10/24	登野城公民館長 C	登野城集落について
3	2018/10/24	米原公民館長 D	米原集落について
4	2018/11/9	白保公民館長 E	白保集落について
5	2018/11/9	宮良公民館長 F 副公民館長 G	宮良集落について
6	2018/11/10	名蔵公民館長 H	名蔵集落について
7	2018/11/10	川原公民館長 I	川原集落について
8	2018/11/11	伊原間公民館長 J	伊原間集落について
9	2019/1/8	白保公民館長 D	白保アンケート結果について
10	2019/1/9	宮良公民館長 F	宮良アンケート結果について
11	2019/1/9	米原公民館長 D	米原アンケート結果について
12	2019/1/10	川原公民館長 I	川原アンケート結果について
13	2019/1/10	登野城公民館長 C	登野城アンケート結果について
14	2019/1/11	名蔵公民館長 H	名蔵アンケート結果について
15	2019/1/11	伊原間公民館長 J	伊原間アンケート結果について

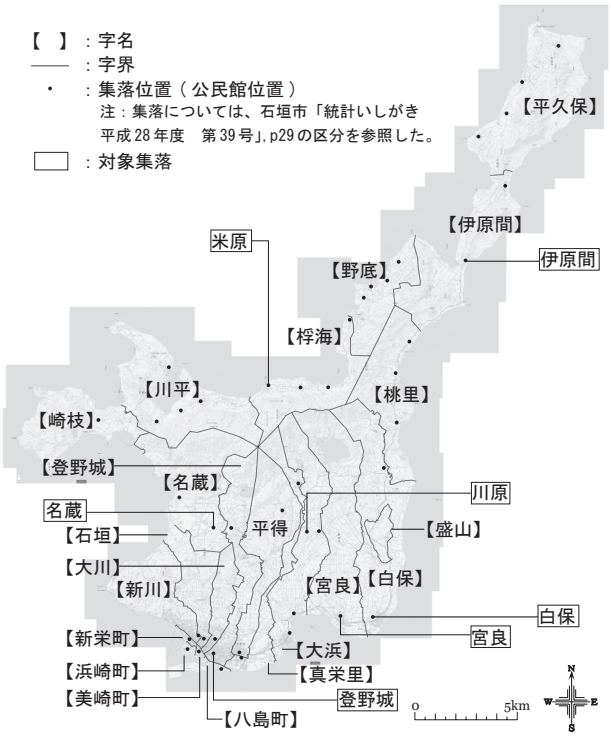

図 1：石垣島の字と集落位置

石垣島は、日本最西端に位置する八重山諸島の主島である。石垣島は 22 の字に分かれ、その中に集落が点在している。集落運営の基本は公民館組織（以下:公民館）であり、公民館長がその代表である。公民館の中に青年会や婦人会などが組織されている集落もある。中心市街地である登野城、大川、石垣、新川は合わせて四か村あるいは四か字（以下：四か字）と呼ばれている。

近代化以前の石垣島の主産業は一次産業であった。マラリアの温床となりやすい水田に近接した居住の回避や、耕地不足により多くの集落が遠距離通耕をおこなっていた。また漁業を営み半農半漁の生活を営む集落もあった。現在の石垣島の主産業は農業と観光業である。農業では、サトウキビやパイナップルの栽培が盛んである。また畜産業も行われている。

石垣島の集落形成の起源は、最も早いといわれる四か字で穴居時代末頃とされているが、他集落を含めその詳

表 3：アンケート概要

対象集落	配布	回収	回収率	男／女	年齢構成			公民館関係者
					10 ～ 30 代	40 ～ 50 代	60 代～	
登野城	20	20	100 %	5/15	1	3	16	19
宮良	12	6	50 %	6/6	1	3	2	6
白保	20	13	65 %	9/4	1	10	2	13
名蔵	15	8	53 %	7/1	0	5	3	6
川原	25	16	64 %	13/3	5	7	4	15
米原	22	11	50 %	7/3	1	8	2	1
伊原間	22	10	45 %	7/3	1	6	3	8

表 4：石垣島の歴史の概要

西暦	主な出来事
	集落の成立起源の詳細は不明 石垣・登野城起源は穴居時代末頃
10C 頃	焼畑作による根菜・雑穀型農耕が成立
12C 頃	冬作の雑穀類に新たに稲作も追加
1543	八重山統治の中心蔵元が竹富島から石垣島大川に移転
1628	三間切制 (地域単位) へ移行（石垣間切, 宮良間切, 大浜間切）
1633	蔵元が登野城に移転（同敷地は蔵元廃止後も行政の中心地）
1637	人頭税開始、周辺島々からの寄百姓で新村が成立
1771	明和大津波（人口 48.6 % が死亡） その後も飢饉・マラリアなどにより人口が減少
1872	廃藩置県により琉球藩設置、外部資本による開墾開始
1879	琉球藩廃止、沖縄県設置
1880	八重山島役所開庁
1881	製糖用さとうきび導入、沖縄県庁による指導奨励
1902	人頭税廃止（その後人頭税時代の新村に廃村が相次ぐ）
1935 頃	パイン事業経営のため台湾人移住
1938	沖縄県振興 15 カ年計画による新村成立
戦時中	市街地から内陸部等へ強制疎開、人口過半数がマラリア罹患
～ 1957	耕作地を求め沖縄各島から石垣島への移民増
1970	マラリア撲滅宣言
1972	沖縄県本土復帰、開発業者が沿岸部土地の買い占め
1983	市街地沿岸の埋め立て開始
2000	WWF ジャパンがサンゴ礁保護研究センターを白保に開設
2006	石垣島への移住ブームがピーク、1 年に 1840 人が移住
2007	離島ターミナル供用開始
2013	新石垣空港開港

細は不明である。文献に残る最初の記録は早くて 17 世紀である。その後、琉球王府の人頭税制度や開拓、その後の琉球藩や沖縄県の政策による開拓事業などの政策によっても多くの集落が形成されたが、マラリアや自然災害の影響により、廃村や分村を繰り返し集落が形成されてきた。特に 1771 年の明和の大津波（以下：明和大津波）は、沿岸部を中心に各集落に壊滅的な被害をもたらし、その後の集落形成に大きな影響を与えている。

1972 年の沖縄県の日本本土復帰を機に本土の資本が流入し、沿岸部の観光開発等を目的とした土地の買占めなどが生じた。さらに 1980 年代頃から本土からの移住が増え始めピークであった 2006 年には 1840 人が県外から移住している。移住と同時に観光地化も加速し、2007 年に離島ターミナルが開港、2013 年には新石垣空港が開港し、観光客数が大幅に増加した。観光客数は年々増加し、年間 100 万人を超えたが、今後も増加傾向が続くと予想される。

石垣島の集落では現在でも多くの伝統行事や祭祀が行われている。生業に関わる行事の減少などが見られる一方で、現在でも豊年祭を重視している集落も多い。それらの祭祀の多くは御嶽という聖所でおこなわれている。開拓集落では御嶽がなく、祭祀がおこなわれていない集落もある。また近年地域振興の行事がおこなわれる地域もある。

各集落の特徴を表 5 に整理した。以上の石垣島の特徴を踏まえ、集落起源・成立経緯の特徴（近世以前から形成された集落、自由移民集落、戦前の沖縄振興 15 カ年計画による計画移民集落）と、立地地域が分散するように集落を選定し、その中で石垣市へのヒアリングから、生業、伝統行事の継承、移住者の影響等との関連性を調査でき、かつ公民館長を通した調査協力が得られた 7 集落を選定した。

なお本研究は、各集落の特徴を複合的に把握する指標の考察に向けた萌芽的位置付けにあるため、できるだけ複数の特徴を有している集落を選定した。

その結果、近世以前から集落として発展し都市化が顕著な現市街地の登野城、同じく近世以前から集落として発展し伝統的な行事や地域社会の特徴の継承が指摘されており、旧大浜町の中心的集落である宮良、白保、観光開発の影響や移住者が少なく少子高齢化傾向にある島中心部から自由移民・再建集落の名蔵、戦前計画移民集落で地域振興行事がある川原、観光開発や移住者の影響が強く、従来の開拓民は少子高齢化傾向にある島北西の海岸部の戦後移民集落である米原、村の統合により近世に形成され、現在地域振興に取り組む北部地域の中心地である伊原間の 7 つの集落を選定した（表 6、以下：対象集落）。

2.2 登野城

登野城は四か字と呼ばれる石垣島の南の市街地に位置する。字の範囲は南北に細長く 26 の小字に分かれている。

石垣・登野城両村の起源は穴居時代に遡るといわれているが、その詳細は不明である。登野城の人口の記録は 1651（慶安 4）年の琉球八重山島取調書がもっとも古い。1675（延宝 3）年石垣・登野城両村の境界が定められ、その後の両村の人口増加により 1757（宝暦 7）年石垣村から新川村が、登野城村から大川村が分村し、現在の四カ村（四カ字）の区域が定められた。登野城は行政の中心地として役割を果たしてきた。1633 年八重山の中央政庁である蔵元が登野城に移され、その後も明和の大津波後の移動を除けば、行政庁が置かれてきた。戦後は学校が多く設置され、教育の中心地としての役割も果たしている。

登野城の人口は戦後急激に増加し、現在の登野城の範囲は、旧集落範囲の北側と埋め立てた南側に拡大している（図 2）。官公庁施設が旧蔵元位置に現在も集中して立地している一方、学校や運動公園などの公共施設が、旧

表 5：石垣島集落の特徴と対象集落

		集落名	人口 (H27)	集落起源 ※1	成立経緯 ※2	地域 ※3	生業 (農業※4・観光※5)	伝統行事・地域振興 ※6
近世以前成立	四か字	登野城	9,357	不明（伝説）	旧集落を基礎に発展	南部市街地	農業／畜産／観光○	伝統行事継承
		大川	3,602	1757 登野城から分離・成立	旧集落を基礎に発展	南部市街地	農業／畜産／観光○	伝統行事継承
		石垣	3,888	不明（伝説）	旧集落を基礎に発展	南部市街地	農業／畜産／観光○	伝統行事継承
		新川	8,743	1757 石垣から分離・成立	旧集落を基礎に発展	南部市街地	農業／畜産／観光○	伝統行事継承
	四か字から分村	平得	2,741	不明 1693 登野城から独立（黒島からの寄百姓含）	旧集落を基礎に発展	南部市街地	農業／畜産／観光	伝統行事継承
		真栄里	5,132	不明 1765 平得から独立	旧集落を基礎に発展	南部市街地	農業／畜産／観光○（ビーチ）	伝統行事継承
	大浜	大浜	3,386	不明	旧集落を基礎に発展	南部	農業／畜産／観光	伝統行事継承
	宮良間切	宮良	1,833	不明（伝説）	旧集落を基礎に発展	南部	農業／畜産／観光○（宮良川）	伝統行事継承
		白保	1,590	不明（伝説）1713 宮良から独立	旧集落を基礎に発展	南部	農業○／畜産／観光○	伝統行事継承
	川平	川平	717	不明 小村の集合から現在地に移住（1686 ～ 1909）	旧集落を基礎に発展	西部（字川平）	農業／畜産／観光○（ビーチ）	伝統行事継承
近世以前成立自由移民集落・再建集落	自由移民集落・再建集落	崎枝	153	不明 1734 川平から独立	戦後自由移民・再建集落	西部（字崎枝）	農業○／畜産	伝統行事継承
		名蔵	334	不明 廃村後、1947 に台湾人（戦前から入植）を含む移住者により再建	自由移民集落・再建集落	中部	農業（さとうきび）○畜産／観光（アンパル）	伝統行事継承
		元名蔵	83	1686 廃村後、1948 に宮古島・沖縄本島などからの移住者により再建	自由移民集落・再建集落	中部	農業／観光（やいま村）	
		伊原間	198	不明 終戦直後には 20 戸だったが宮古島からの移住により再建	自由移民集落・再建集落・半再建集落	北部	農業／畜産／観光（展望台）	伝統行事継承
		平久保	73	不明 終戦直後には 7 戸だったが移住により再建	計画移民集落・再建集落	北部	農業○／畜産○／観光○（展望台）	伝統行事継承
自由移民集落	自由移民集落	大嵩	16	1948 宮古島から	自由移民集落	西部（字川平）	－	
		仲筋	12	1948 宮古島・地元から	自由移民集落	西部（字川平）	－	
		富野	25	1947 旧桴海部落民と各地からの移住者によって成立	自由移民集落・再建集落	西部（字桴海）	農業○	
		大田	29	1955 頃 宮古島・地元などから	自由移民集落	西部（字桴海）	－	
		三和	35	1950 宮古島などから	自由移民集落	中部	農業○／畜産	地域振興行事
		大野	10	1955 戦前から移住者は存在	自由移民集落	東部	－	
	戦前からの移民集落	嵩田	152	1947 台湾人（戦前から入植）を含む移住者により成立	自由移民集落	中部	農業○／畜産	
		磯部	625	1937 頃 製糖工場が起源	自由移民集落	南部	農業／畜産	
計画移民集落	沖縄振興 15 カ年計画	開南	92	1938 沖縄本島・地元の移民（本島出身者）など	沖縄振興 15 ヶ年計画	中部	農業○	
		川原	246	1941 沖縄本島から	沖縄振興 15 ヶ年計画	中部	農業（パイン）○／畜産	地域振興行事
	計画移民集落	吉原	259	1953 宮古島などから	計画移民集落	西部（字川平）	農業／畜産／観光○	
		米原	144	1952 沖縄本島などから	計画移民集落	西部（字桴海）	農業／観光○（ビーチ）	
		伊土名	65	1956 下地開拓団から分離	計画移民集落	西部（字野底）	観光○（エコツアー）	
		於茂登	59	1957 沖縄本島などから	計画移民集落	中部	農業○	伝統行事継承
		大里	111	1953 沖縄本島などから	計画移民集落	東部	農業○／畜産○	
		星野	171	1950 沖縄本島・宮古島などから	計画移民集落	東部	農業○／畜産	地域振興行事
		伊野田	158	1951 沖縄本島などから（もともと戦前には県外者が開拓）	計画移民集落	東部	農業○／畜産／観光○（キャンプ場）	地域振興行事
		明石	136	1955 沖縄本島などから	計画移民集落	北部	農業○	地域振興行事
		兼城	52	1954 沖縄本島の兼城村などから	計画移民集落	西部（字野底）	農業○	
		下地	151	1954 宮古島の下地などから	計画移民集落	西部（字野底）	－	地域振興行事
		多良間	39	1954 宮古島の多良間村などから	計画移民集落	西部（字野底）	農業○／観光	
		栄	87	1964 1954 年に入植した越来・美野が合併して成立	計画移民集落	西部（字野底）	農業○／畜産	
		久宇良	28	1956 政府による入植前の準備あり	計画移民集落	北部	農業○／観光（ビーチ）	地域振興行事
		平野	42	1957 沖縄本島を含む各地の島から	計画移民集落	北部	農業○	
		吉野	1	1956 沖縄本島、竹富島などから	計画移民集落	北部	－	
市街地拡大	埋め立て	美崎町	464	1960 年代に埋め立て	市街地拡大	南部市街地	観光業○	
		新栄町	2,607	1960 年代に埋め立て	市街地拡大	南部市街地	農業／畜産／観光○	
		浜崎町	1,186	1960 年代に埋め立て	市街地拡大	南部市街地	観光業／観光○	
		八島町	328	1960 年代に埋め立て	市街地拡大	南部市街地	観光業／観光○	

注：網掛け部分：対象集落。
※ 1 牧野（1972）、高橋（2003）、石垣市総務部市史編集課（2011）参照。
※ 2 牧野（1972）、石垣市総務部市史編集課（2011）参照。
※ 3 石垣市（2018）p. 3 参照。
※ 4 農業・畜産：農林水産省（2015）参照（美崎町、八島町、伊土名、大野、下地、吉野、大嵩、仲筋、大田に関して資料なし）、○：農家割合（戸数）10 % 以上の集落。また農家戸数が 1 戸の元名蔵、吉原、米原、久宇良、明石、多良間は記載無し。
※ 5 観光：たけしょう（2019）pp. 4-7 参照。○：観光スポットとして特筆されたもの。
※ 6 伝統行事継承：波照間（1988）平岡・巣山・宮内（2014）参照、八重山の豊年祭スケジュール（https://yaimatime.com/special/hounensai2018/#q2）参照、地域振興行事：北部地域三大夏祭り、おっかぁ市（伊野田）、キャンピングアース（久宇良）、三川夏祭り（川原・三和）。

表 6：対象集落の概要

対象集落	集落形成の特徴	農就割合	主他産業	備考
登野城	1651 年八重山島取調書記載	2.2 %	観光業	御嶽多数現存 行政教育の中心
宮良	1611 年慶長検地記載	9.8 %	観光業（一部）	豊年祭が秘祭 リゾート開発
白保	1713 年宮良村から独立	12.1 %	観光業	環境保護・空港建設 移住者 2 割程度
名蔵	1611 年慶長検地 自由移民・再建	11.6 %	―	製糖会社立地 散居集落形態
川原	1941 年沖縄振興 15 カ年計画	15.7 %	―	豊見城より移民 隣接集落と地域行事
米原	1952 年入植 計画移民	3.7 %	観光業	リゾート開発 観光関係移住者
伊原間	1711 年内の村 1737 年伊原間村	5.3 %	畜産業 漁業	北部地域の中心 移住者 5 割程度

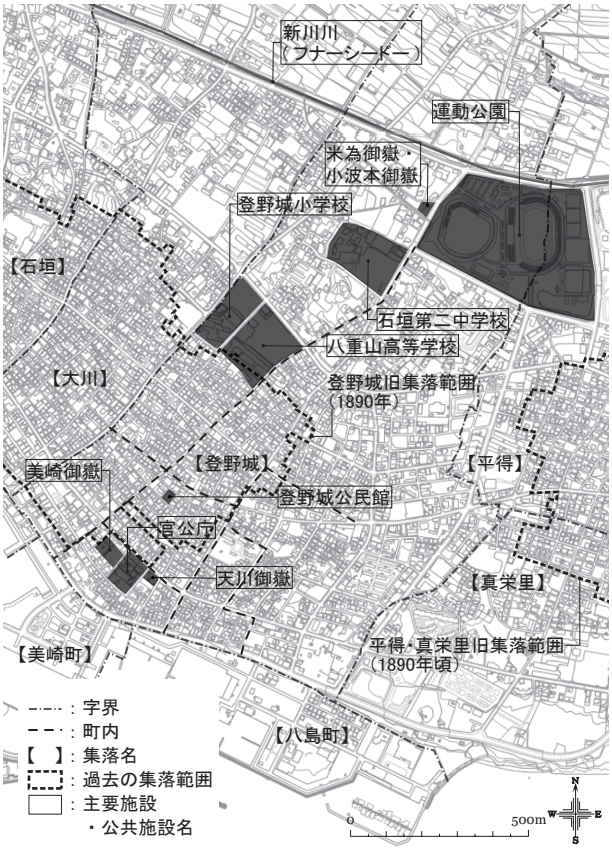

図 2：登野城集落の空間的特徴

集落の範囲の北側に整備されている。

登野城の生業の基本は農業であったが、人口増加に対して耕地が足りず遠方まで耕作に通っていた。現在も四カ字の中ではもっとも経営耕作地面積が広い集落である。

登野城公民館が所管する範囲は 7 つの町内に分かれており、町内ごとの取り組みも盛んである。登野城では神司と公民館を中心に祭祀が継承され、現在でも豊年祭をはじめ多くの祭祀・行事がおこなわれている。

2.3 宮良

宮良は石垣島の東南に位置する。字宮良の範囲は南北に細長く 30 の小字に分かれている。宮良村が文献上初めて登場するのは、1611 年慶長検地の宮良間切宮良村の記録である。17 世紀を通して人口が増加したが、明和大津波により 1,221 人中 1,050 名死亡と壊滅的被害を被った。被災後小浜島より寄百姓をして再建された。戦後にかけて徐々に津波被害前程度まで人口が回復したが、高度経済成長期に再び人口減に転じ、近年は横ばいである。

宮良村は過去に 2 度大きく移動している（図 3）。1 回目は明和大津波後の内陸の神田村やカナバカ村への移転である。その後両村とも旧集落位置に戻っている。2 回目は 1874 年戌年台風の被災後に当時の集落背後の台地上への移転である。この移転先が現在の集落範囲の中心であり、旧集落位置はそれ以降シィムヌカクと呼ばれている。その後の人口増加に伴い居住範囲が主に北方と南東方向へ拡大している。近年の移住者は集落の中に分散するか、集合住宅に居住している。

小学校や公民館などの公共施設は居住範囲の北側に位置する。居住範囲内にも御嶽はあるが、御嶽の多くは居

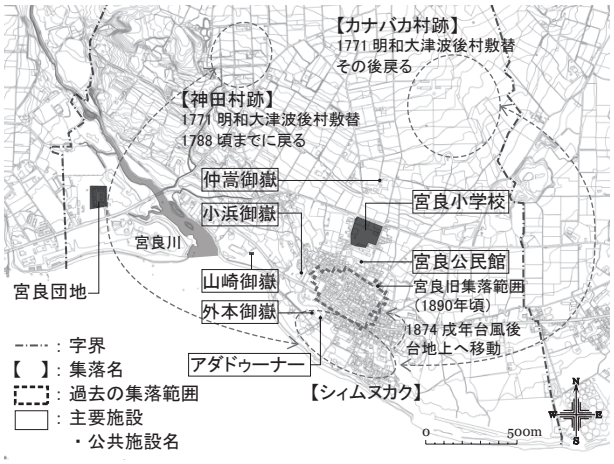

図 3：宮良集落の空間的特徴

住範囲外の西から南西にある。宮良川の対岸に宮良団地がある。団地は独立した運営組織をもち、公民館に所属しない人も多い。また、居住範囲の周囲にリゾートホテル等の観光施設がある。

宮良の人々は集落に近い範囲で耕作や放牧をおこない農業を営むとともに、林業、漁業などに従事してきた。

集落創立の神話に登場する 6 神のうち 3 神が仲嵩御嶽、山崎御嶽、外本御嶽に祀られている。明和大津波後に小浜島から移住してきた住民が小浜御嶽を建立した。宮良の豊年祭は秘祭といわれ、宮良に居住し御嶽の氏子しか参加できないが、公民館の審査に通れば移住者も参加することができる。またその内容を語ることや記録も禁じられている。豊年祭以外の行事は希望すれば誰でも参加できる。

2.4 白保

白保は石垣島の南東に位置する。字白保の範囲は南北に細長く東は海に面し 30 程の小字に分かれている。

集落の起源は古く、近世には宮良村とともに宮良間切を形成していたが、1713 年に波照間村からの寄百姓し行政単位の白保村として独立した。明和大津波により壊滅的な被害を受けたが、被災後、波照間島から寄百姓し再建した。白保は遠距離通耕をおこなっていたが、遠距離耕地の近傍に新村（1732 年桃里村、1768 年仲与銘村、1785 年盛山村）を設置した。現在は 3 村とも廃村となっている。その後も白保の住民はこれらの集落位置まで農業や漁業のために通っていた。

明治期の集落範囲から人口増加に伴い南側へ居住範囲が拡大している（図 4）。拡大した南側には近年移住した住民が多い。旧道は従来の集落範囲の中心を通っていたが、国道は集落北西側に整備され、学校や公民館は国道を挟んで居住範囲と反対の北側に位置している。

元来白保の住民は半農半漁の生活を営んでいたが、戦後多良間島から漁を中心に生活を営む人々が流入し、サンゴ礁を利用した漁を始めた。現在はダイビング等の観光業を営む人々もいる。一方、字白保の多くの土地は現在も耕地として利用されている。2013 年に新石垣空港を開港する際、元農地であった字白保の小字盛山はほぼ空港敷地となった。

白保では現在も多くの祭祀・行事がおこなわれている。中でも最も大きい祭祀は豊年祭であり 3 日間かけておこなわれる。移住者の中には積極的に地域行事に参加する人もいる。白保には波照間島、多良間島など様々な地域からの移民を受け入れる中で育まれてきた「よってらっしゃい」という意味の「ゆらてぃく」という精神がある。

白保は 1970 年代頃より空港建設に対する反対運動、環境保護運動等の影響を受けている。近年では、リゾートホテルの開発計画に対する反対運動が起きている。

2.5 名蔵

名蔵は石垣島の西に位置する。

1611 年慶長検地に那蔵村の記録がある。1686 年スンニに村敷替をおこない、1738 年に石垣、登野城から寄百姓をして独立した。1870 年代には人口が激減し、1876 年に元の敷地に戻りスンニは元名蔵と呼ばれるようになった。その後名蔵開墾が注目され内地から移住者が増えた。移住者により製糖業が開始され八重山糖業会社が設立された。しかし、1902 年に八重山糖業株式会社は解散、名蔵集落もマラリア等の影響による人口減のため 1916 年に廃村となった。翌年名蔵の土地は東洋精糖株式会社に売却され、1927 年吸収合併した大日本精糖のものとなった。1930 年代から台湾人の入植が始まったが、終戦後名蔵の台湾人は嵩田に移住した。1940 年代より宮古島から移住した住民が大日本製糖より小作権を得て開拓に従事した。1955 年に指定地区に移住した自由移民が補助の対象となった。1958 年に新たな名蔵部落会が設立、1961 年に石垣島製糖株式会社が設立された。

図 4：白保集落の空間的特徴

廃村前の 1890 年頃の集落位置を確認すると現在の居住範囲の北西に位置していたことがわかる（図 5）。現在の名蔵集落は、製糖工場の立地の後、家屋が広がるように形成されたが、名蔵の居住範囲が散居形態をとっているのは、大日本製糖より小作権を得た住民が借り受けた土地に家と畑を整備し、後に払い下げられたためである。公民館・小学校・幼稚園など人々が集まる主要な場所は固まって立地している。また石垣島製糖の敷地がかなりの面積を占めている。このように集落内部に製糖工場が

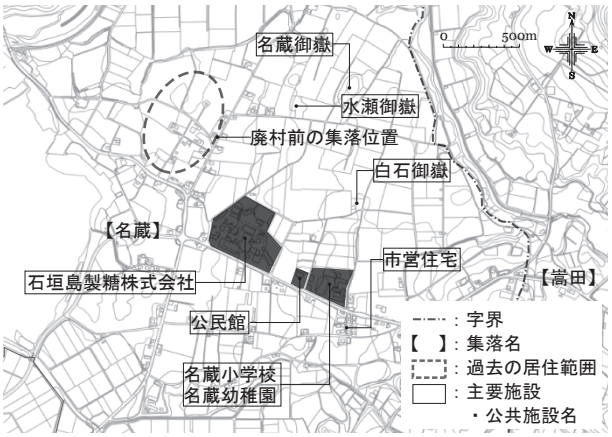

図 5：名蔵集落の空間的特徴

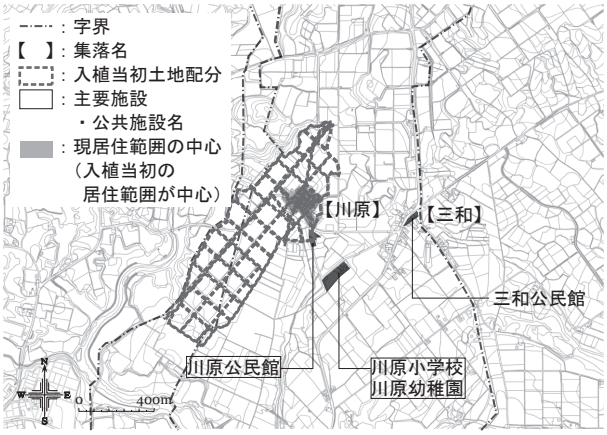

図 6：川原集落の空間的特徴

あるため輸送コストがかからず、名蔵のさとうきび農家は恩恵を受けている。また道路を挟んで名蔵小学校の南には市営住宅が建設されている。

名蔵平野は古くから水田適地として名蔵の住民と四か字の住民により開田され、石垣島の主要な穀倉地帯を形成していた。自由移民を起源とする現在の住民は、廃村前の名蔵集落の住民が設立した名蔵御嶽、水瀬御嶽、白水御嶽を信仰している。開拓集落であるため伝統行事は少ない。豊年祭に学校も参加するため、地域の子供達が参加している。名蔵公民館では、毎週土曜午前に「土曜軽トラ市」、日曜午前にグラウンドゴルフがおこなわれ、地域住民、特に高齢者が集まる機会となっている。新規の移住者が土地を得ることは難しく、市営住宅に住むことが多く、市営住宅の住民は公民館組織に入らない場合が多い。

名蔵小学校には嵩田、元名蔵の児童も通っている。

2.6 川原

川原は石垣島中央東部に位置する。

1941 年に 12 戸が入植し成立。うち 7 世帯は豊見城村からの計画移民であった。当初 7 世帯が 2 軒の家に分かれて居住し、自給用作物栽培のための開墾と家屋建設にあたった。農業基盤が完成した後は防風林を整備し、マラリアや戦争の影響を受けながらも共同生活を基盤として開拓を進めてきた。

川原入植時の土地配分図と比較すると、畑の範囲が拡大した一方、主な居住範囲は入植時から大きく変化していない（図 6）。居住範囲の南側に公民館、さらに離れた位置に小学校が建てられている。小学校・幼稚園は東の隣接集落である三和の児童も通っている。

川原はさとうきび，パインアップルの栽培により発展した。特に加工品ではなく生果販売による生産拡大につなげた点が特徴的である。

主な行事である新年会、成人式、三川夏祭りは三和集落と合同でおこなう。これらの行事の際には仕事などで集落の外に出ていた人々も帰ってくる．三和は川原より 9 年遅い 1950 年に成立し、宮古島出身の移民が多い。川原とは協力して発展してきた。三和にも公民館があるが、先述の行事に加え、青年会活動も合同である。三川祭りは、地域の農作物をアピールするために川原と三和が合同で 1982 年に始めた。一時取りやめになったが 2011 年に青年会主催で再開された。

2.7 米原

米原は石垣島中央北部に位置する。

1952 年に読谷村からの計画移民により成立。翌 1953 年に西隣の吉原集落が成立した。米原の土地は平地が少なく、開拓の困難が多かったため、退団するものもいた。1971 年に沖縄が日本本土に復帰した頃は、米原だけでなく石垣島全体で多くの人口が流出した。米原は海が見えるリゾート開発・観光開発に好条件の土地であり、土地売却による米原の退団者増加に拍車をかけた。その結果、米原の人口は 1970 年から 1980 年の 10 年間におよそ半数となった。一方、売られた土地はホテル用地となったほか、本土から移住者が個人購入した。その影響もあり人口は再び増加したが、現在は米原の住民のうち 3 分の 2 程度が県外からの移住者となっている。

米原の集落は北側に米原ビーチ、米原キャンプ場がある西側と、ヤエヤマヤシ群落の北側、道路を挟んで南北

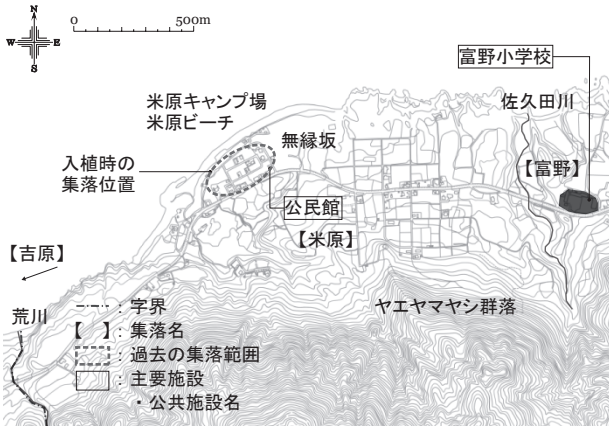

図 7：米原集落の空間的特徴

に位置する東側に分かれている（図 7）。1952 年の入植時には、先発隊は佐久田川の河口部、沿岸部に仮宿舎を建て、現在の西側居住範囲に掘建小屋を建てた時点で読谷村の家族を迎え入れ、集落を形成し始めた。東側の居住範囲はその後に開拓された。二つの居住範囲の間には無縁坂と呼ばれる移住前から骨が埋められている地域があったため、そこを避けて二箇所に分かれて開拓された。東の富野集落、西の吉原集落とは良好な関係を築いてきた。両集落との境は集落間の暗黙の了解で川を境界とし、米原の範囲は荒川と佐久田川の間とされている。

1972 年の本土復帰等により住民が退団する際、残る住民が、退団者の持つ耕作可能な山側の土地を、退団前に海沿いの自分の土地と交換することがあった。その結果地元住民が山沿いの畑を持ち、退団者の土地を購入した企業や移住者は比較的海沿い土地を所有することとなった。その後、2007 年にヤエヤマヤシ群落が国立公園に指定されると、山側の群落入口付近に観光客向け店舗が建てられた。また畑の奥には移住者向け集合住宅も建てられ、現在は山側にも移住者が居住している。米原キャンプ場や米原ビーチには多くの観光客が訪れるため、国道沿いには観光客向け店舗が並んでいる。

米原の地域行事は 9 月の敬老会、ビーチクリーニング、12 月の忘年会のみである。地域運営に参画する移住者は限られており、全く関与しないものもいる。現在、移住者のうち公民館に所属している人口は 3 分の 1 程度である。

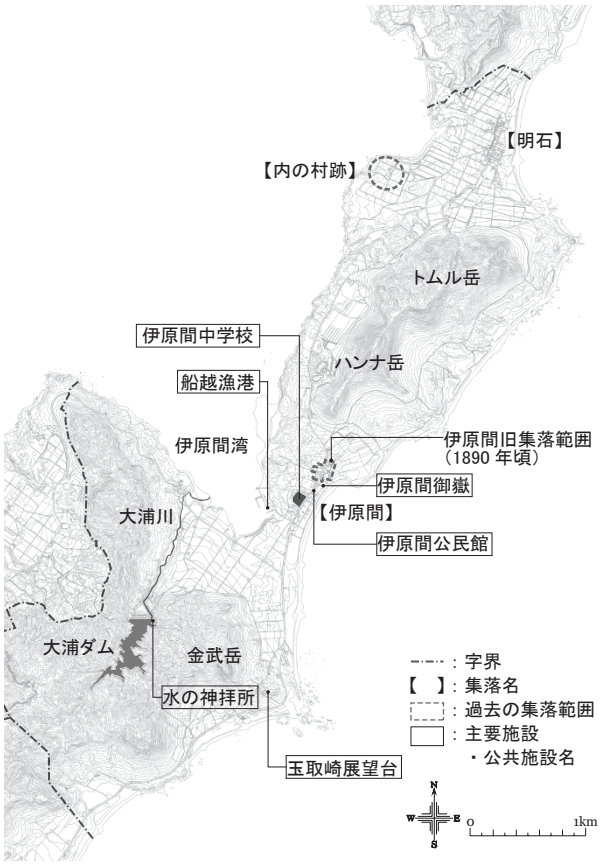

図 8：伊原間集落の空間的特徴

2.8 伊原間

伊原間は石垣島北部地方に位置する。北はハンナ岳、南は金武岳、東は太平洋、西は東シナ海に囲まれている。

伊原間はその起源は古いものの、住民の移入、流出、村敷替が比較的多い集落である。伊原間村の起源の一つは、内の村である。内の村は、1711 年竹富村、新城村からの移民により形成されたが、当初は平久保村の管轄下にあった。1734 年に石垣、登野城の住民が加わり独立村となり、現在の居住範囲に近い箇所に移動した。1737 年に内の村と船越村が合併し、伊原間村となった。明和大津波で人口が激減した後は黒島から、戦後には宮古島からの多くの移民を受け入れてきた。近年は日本本土からの移住が非常に多く、人口の半分以上を占めている。

内の村は現在の明石に近い場所にあった（図 8）。1734 年に独立村となる際、現在の居住範囲付近に移動し、明和大津波後標高の高い場所に移転した。大正期の居住範囲は現在より狭く、そこから次第に南に拡大してきたことがわかる。現在は、道路沿いに南北に長く居住範囲が広がっている。中学校や公民館、御嶽は集落の地理的中心に立地している。集落内部には集合住宅も存在する。集落西側は伊原間漁港であり、東側は砂浜になっている。大浦ダムには水の神の拝所がある。

伊原間の住民は、農業、畜産業、漁業等に従事してきた。移住者は民宿や、マリンレジャー関連など観光業に従事していることが多い。

戦前に人口が激減したものの廃村は免れ御嶽が継承されていることもあり、多くの伝統行事が残っている。伊原間には元々 6 つの御嶽があったが、神司の後継者がいない期間が続き、1972 年に合祀を決定、翌 1973 年ナカヌオンがあった公民館横に新たに伊原間御嶽を整備した。伊原間御嶽に合祀された半嵩御嶽は、明和大津波後に黒島から強制移住させられた人々も信仰しており、移住者が移住先の御嶽の中に入ったのは伊原間の特徴であったといえる。住民に占める移住者の割合が高く、地域行事も移住者の協力のもとおこなわれている。現在公民館組織には 70 戸近くが所属している。若い移住者の中にも積極的に地域行事に参加する人もいる。集落対抗のハーリー競漕など北部の他集落と協力した行事もおこなっている。

2015 年石垣市北部農村活性化協議会が結成され、集落機能の維持、持続型農業の推進、自然環境の保全、伝統文化の継承などにより北部地域全体の活性化を図ることを目的に活動をしている。現在北部地域の 13 の公民館が所属し、市の開催、畑おこし講習会などをおこなっている。

3. 空間認識の特徴

3.1 地域範囲に関する認識の特徴の整理

アンケート形式のサイトマップ法の結果を元に、主に地域運営を担っている地域住民のもつ、地域範囲と中心に関する空間認識の特徴を集落ごとに記述し、2 章の分析結果から考察するとともに公民館長に追加のヒアリング

調査をおこない、関連する要因等について整理した。

その結果、各集落の地域範囲の認識において共通して複数の特徴的な境界（以下：階層的な境界）と各境界に関連する要因が抽出された。以下集落ごとにその詳細を述べる。

3.2 登野城の地域範囲に関する認識の特徴

登野城の範囲に関する空間認識において、集落起源である旧集落範囲を中心に北と東西方向に階層的な境界が抽出された（図 9）。居住範囲、生業・土地利用、集落の境との関係が各境界の要因として指摘された。

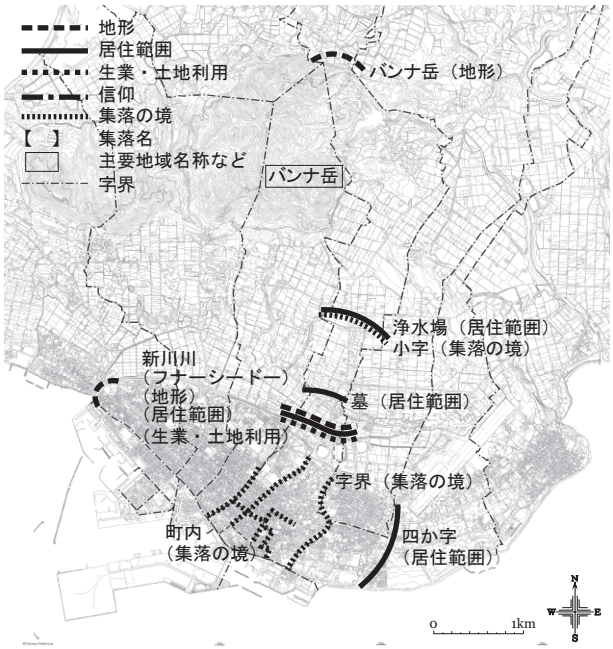

図 9：登野城集落の地域範囲に関する認識の特徴

北側は、旧集落範囲北側の新川川、墓、浄水場、バンナ岳のどこまでを含めるかによって階層的な境界が抽出された。ここから地域住民の空間認識に遠距離通耕等を背景に北方向に長い登野城の字範囲や、集落形成に関わる施設の分布の影響があることがわかる。また隣接する大川（西）、平得、前栄里（東）との境界部も地域範囲として認識されている一方で、四か字をまとめた居住範囲全体を指して地域範囲とする回答があり、都市化する四か字を一体的に捉える住民の存在が指摘できる。また旧集落範囲内の町内会を地域範囲とする回答もあり、町内単位の活動が活発な登野城の特徴が表れた。

3.3 宮良の地域範囲に関する認識の特徴

宮良の範囲に関する空間認識において、旧集落範囲である主な居住範囲の北側に階層的な境界が抽出された（図 10）。居住範囲、信仰、集落の境との関係が各境界の要因として指摘された。

現在の住宅や施設が広がっている居住範囲全体を地域範囲とする回答があった一方で、旧集落範囲付近のみを

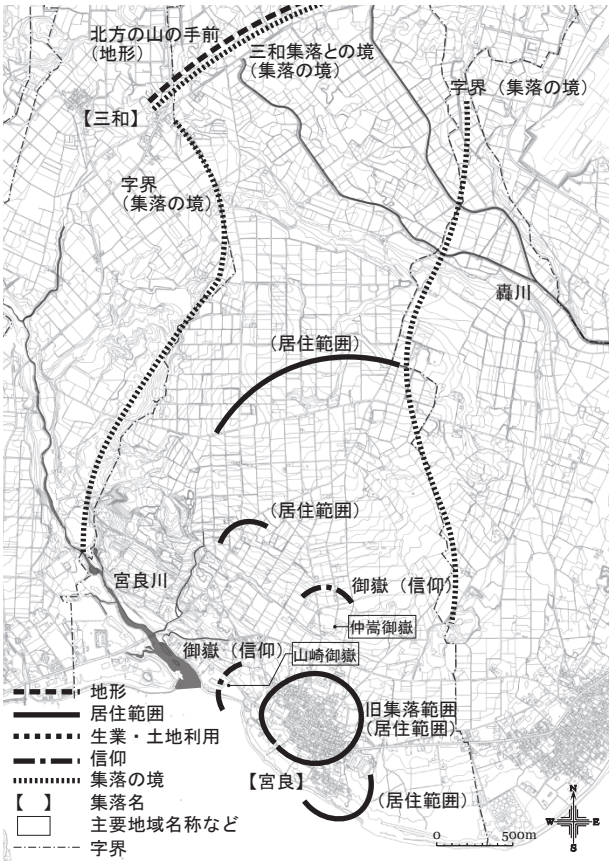

図 10：宮良集落の地域範囲に関する認識の特徴

地域範囲とする回答が一定数みられた。これは豊年祭が秘祭とされ氏子以外は参加できないなど、現代も続く特徴的なコミュニティの中で、歴史的な集落範囲の認識が継承されている影響と考えられる。また居住範囲外に位置し信仰行事をおこなう仲嵩御嶽、山崎御嶽までを地域範囲とする回答や、白保（東）、磯辺（西）、三和（北）の隣接集落との字界を境界とする回答があった。

3.4 白保の地域範囲に関する認識の特徴

白保の範囲に関する空間認識において、旧集落範囲を中心とする居住範囲の北側に階層的な境界が抽出された（図 11）。地形、生業・土地利用、集落の境との関係が各境界の要因として指摘された。

カラ岳の北側を境界とする回答が多くみられた。カラ岳の北にある大里付近は、以前は白保集落から派生した桃里村が位置したが衰退し、現在は桃里村が廃村後に形成された計画移民集落がある。そのため、両村の境が境界として認識されたと考えられる。一方で白保住民がかつてカラ岳から東の海を望み願い事をするという慣習を有していたことや、八重山民謡「桃里節」に琉球王府時代の遠見番が置かれたと歌われていることなども、カラ岳を境界として認識した要因と考えられる。また近年、空港建設のため字盛山付近の土地を譲渡し、大里付近の耕地を入手し生業を継続している住民もいるため、生業・土地利用の面から大里までを地域の範囲として認識した

図 11：白保集落の地域範囲に関する認識の特徴

と考えられる。一方、過去大里集落北の通路川まで漁に通ったという歴史的事象から通路川を境界とする回答もあった。以上のように一部現在は行われていない慣習や生業と関連する境界の認識により広範囲を地域範囲と捉える傾向が見られた。その理由の１つとして白保集落では年長者から集落の歴史について言い伝えられているからという指摘があった。

3.5 名蔵の地域範囲に関する認識の特徴

名蔵の範囲に関する空間認識において、名蔵湾に面する西側以外に階層的な境界が抽出された（図 12）。地形、居住範囲、生業・土地利用、集落の境との関係が各境界の要因として指摘された。

現在の名蔵は自由移民による集落再建を含む集落形成の特徴から散居集落の形態を持つため、居住範囲としてどこを含めるかによって地域範囲の境界の認識が異なった。また嵩田の手前までの平地と於茂登岳の一部を含む行政区分上の字界を境界とする回答もみられた。一方で於茂登岳やバンナ岳の麓までを地域範囲とする回答があった。これは、これらの山に囲まれている名蔵集落の地形上の特徴の影響と、畑が広がる範囲という土地利用面の主に 2 つの要因による。また嵩田、元名蔵など歴史的に関連性が深い近隣集落と現在でも交流が多く、両集落を含む範囲を地域範囲とする回答もみられた。

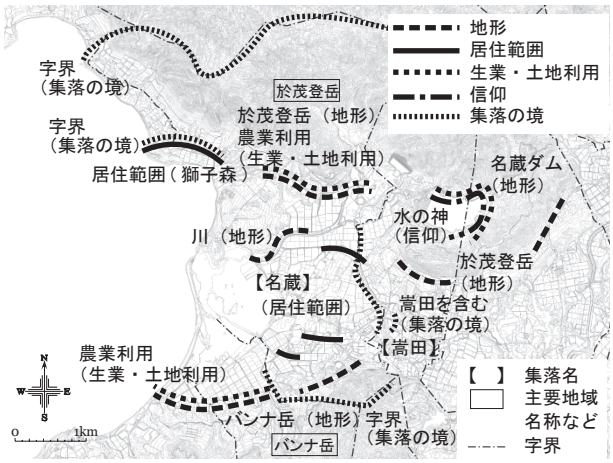

図 12：名蔵集落の地域範囲に関する認識の特徴

3.6 川原の地域範囲に関する認識の特徴

川原の範囲に関する空間認識において、入植時の居住範囲を中心に階層的な境界が抽出された（図 13）。地形、居住範囲、生業・土地利用、集落の境との関係が各境界の要因として指摘された。

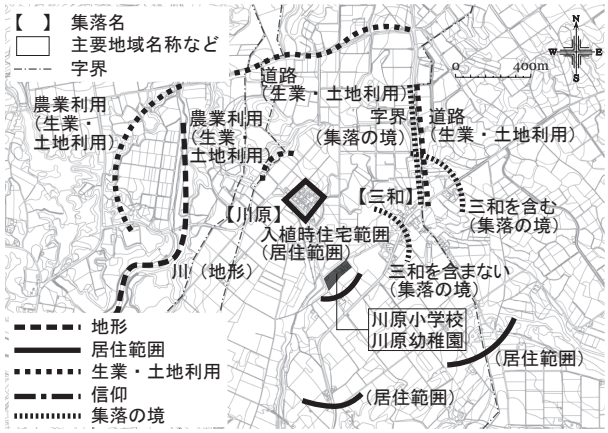

図 13：川原集落の地域範囲に関する認識の特徴

居住範囲として入植時の住宅範囲を中心とするものと、点在する宅地までを含む境界が抽出された。西側の川は境界として認識されたものの、地形が平坦なため山などの地形的特徴が地域範囲の認識に影響している様子はみられなかった。主産業である農業に関連し、畑地の境界部を地域範囲とする回答もみられた。字界や隣接する三和との境が境界として指摘される一方、川原と三和は幼稚園、小学校を同じくし、三川夏祭りなど青年会の活動を共におこなっているため、三和を含めて地域範囲とする回答がみられた。一方で、歴史的な居住範囲が抽出された宮良や白保とは異なり、入植当時の宅地や畑地の範囲と、現代の地域範囲の認識と深い関連性は見られなかった。

3.7 米原の地域範囲に関する認識の特徴

米原の範囲に関する空間認識において、計画移民としての入植位置を中心に東西方向に階層的な境界が抽出された（図 14）。地形、居住範囲、集落の境との関係が各境界の要因として指摘された。

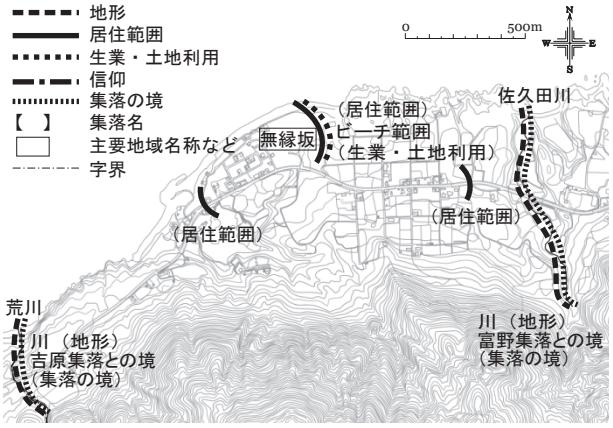

図 14：米原集落の地域範囲に関する認識の特徴

米原の居住範囲は先述のように 2 つのエリアに分かれており、全体を地域範囲とするものがある一方で、観光業に従事する住民を中心に山側の住宅地を地域範囲に含めない回答がみられた。これはこれらの住民の生活が海側の居住範囲付近でのみ営まれている影響と考えられる。また暗黙の了解として隣接集落との境界とされた河川は、入植時から続く農業従事者や地域運営を担っている住民を中心に現在も地域範囲の境界として認識されている。また海沿いの居住範囲を選択している住民の中にはビーチの端部を地域範囲の境界として回答するものがいた。このように入植時から農業に従事してきた住民と近年の移住者によって地域社会のあり方に影響を受ける集落の空間認識に違いがみられた。

3.8 伊原間の地域範囲に関する認識の特徴

伊原間の範囲に関する空間認識において、旧集落範囲を中心とする南北方向に長い距離で階層的な境界が抽出された（図 15）。地形、居住範囲、生業・土地利用、信仰、集落の境との関係が各境界の要因として指摘された。

伊原間は、中心となる居住範囲はまとまっているものの、広い範囲に点在している住居が存在し、それらの住居をどこまで含むかによって地域範囲の回答に差がみられた。また北はハンナ岳、南は金武岳や岬を境界とする回答もあり、名蔵同様近距離に特徴的な山がある場合囲まれた範囲を地域範囲として認識する傾向がみられた。一方でハンナ岳は伊原間、連続するトムル岳は明石の山、という歴史的な認識が集落で共有されているため、ハンナ岳とトムル岳の間を境界とする回答もみられた。伊原間の前身の内の村を含む回答があった一方で、現在旧内の村付近の畑は明石の住民の所有であるためその手前までとする回答もあった。大浦川は水の神がいるとされ信

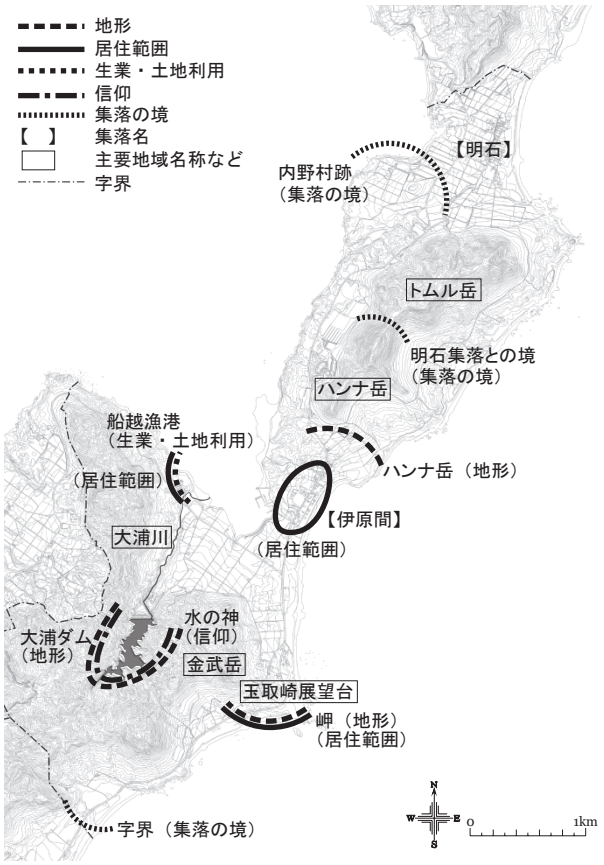

図 15：伊原間集落の地域範囲に関する認識の特徴

仰の対象であり、現在水の神は大浦ダム付近に祀られているため大浦ダムまでを地域範囲とする回答もみられた。

3.9 地域範囲に関する空間認識の特徴

以上のように、地域範囲に関する空間認識に関して、旧集落範囲や入植位置を中心とする居住範囲を中心に、その特定の部分に限定されたものから、居住範囲を大きく超えるものまでスケールの異なる境界が抽出された。またその要因は今回調査において、地形、居住範囲、生業・土地利用、信仰、集落の境の 5 つに大別できることがわかった。これらの結果は、地形に対する空間認識の影響、コミュニティに継承される地域史の影響、土地利用状況の影響、生業・行事における集落内の協働体制の影響等がみられ、地域社会の特徴の一部を表している。さらに今後他の集落や多様なステークホルダーへ対象を広げた調査の計画・設計や、その成果に基づく複雑な生活文化・社会環境の現在の状況を把握と地域社会の特徴の総体を可視化、共有するための基礎データ構築において重要な指標となる。

3.10 地域の中心に関する認識の特徴

地域の中心に関する結果を表 7 に示す。各集落で住民が中心と捉える場所に特徴がみられた。アンケート、ヒアリング対象者が関係者を中心としたメンバーであったことから、公民館は共通して指摘されると想定されたが、米原では公民館を利用した地域行事の頻度が低く、ビー

表 7：地域の中心に関する調査結果

	公民館	学校	御嶽	左記以外で中心と指摘された場所	備考
登野城	◎	○	○	美崎町、天川御嶽周辺、市役所周辺	公民館は地域運営の中心／学校区はコミュニティの単位とずれ／天川御嶽は登野城成立との関連を認識／自分の地域を市街地・四か字と捉えた人は美崎町と回答
宮良	◎	ー	ー	ー	公民館は地域運営の中心／御嶽は各氏子単位で管理・運営しているため宮良全体の中心ではない
白保	○	○	○	郵便局	豊年祭をおこなう嘉手苅御嶽と運営を担う公民館が中心
名蔵	○	○	ー	交差点◎	地域住民が集まる場所として公民館・小学校／交通結節点である交差点／近年御嶽に対する意識の低下
川原	○	○		住宅地	地域住民が集まる場所として公民館・小学校／地域行事を小学校で開催／入植当初から変わらない居住地も中心と捉えられている
米原	○			ビーチ、ヤシ林、旧公民館	公民館利用の頻度は他集落より低い／ビーチを中心として指摘
伊原間	◎	ー	ー	ー	公民館は移住者を含めた活発な地域活動の場／御嶽は中心ではない／中学校は北部全体の子供が通う

注：◎：回答者の過半数が指摘、○：指摘あり、ー：指摘なし。

チやヤシ林といった周辺環境を含めて中心の認識の対象が分散するなど、公民館の利用頻度との関係によって異なる結果もみられた。宮良では御嶽は重要な場所だが氏子単位で管理・運営しているため宮良の中心ではないと指摘される一方で、登野城では集落成立との関連性から、白保では豊年祭との関連から、御嶽を中心として認識するなど、地域の成立などに関する住民の知識、地域行事の運営状況などとの関係によって地域差がみられた。また川原では地域住民が集まる場所として、隣接集落も通う小学校が中心として認識される一方で、伊原間では北部全体の子供たちが通う中学校は中心としては指摘されないなど、学校と地域の関係も中心に関する認識に影響することがわかった。

以上より地域の中心に関する認識から、地域行事の運営を担うコミュニティの単位や関連する各施設の場所性を読み取る可能性が指摘できる。これは行政区等によらず、地域住民が帰属意識を持つコミュニティ単位を適切に見極め、各中心性を持ちうる施設の位置、利用等との関係を整理していくことが、地域社会の特徴の分析において重要なことを示唆している。

4. さいごに

4.1 本研究の成果

本研究の成果は以下の通り。

- 対象集落における地域住民の空間認識について、地域の範囲の認識における階層的な境界を可視化し、その要因が地形、居住範囲、生業・土地利用、信仰、集落の境 5 つに大別できることを示した。
- 地域の中心に関する空間認識について整理し、地域行事の運営を担うコミュニティの単位や関連する各施設の場所性との関係性を指摘した。

4.2 今後の課題

本研究を通して、地域社会と地域戦略、観光戦略の関係性を考察する際に指標となりうる、空間認識からみた地域社会の特徴の一部が抽出された。今後は、移住者や職業形態、地域行事への参加度など、住民による差異を確認しつつ、仮説構築の精度を高め定量的分析等を重ねることで、観光戦略・地域戦略への実践に反映させていくことが期待される。

謝辞

本研究にあたって、石垣市企画部観光文化スポーツ局観光文化課、対象集落の公民館長、アンケート回答にご協力いただいた住民の皆さまに、多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP18 H03417 の助成を受けたものです。

引用文献

麻生美希・増田美樹・佐藤睦美・西山徳明（2009）．農村集落における空間構成の変遷と景観保全の課題．日本建築学会計画系論文集，Vol. 74，2637-2645.

Brown, B., Perkins, D. D., and Brown, G. (2003). Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis. *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 23, 259-271.

千葉徳爾（1972）．八重山諸島におけるマラリアと住民．地理学評論，Vol. 45，No. 7，461-474.

福田アジオ(1980)．村落領域論，武蔵大学人文学会雑誌(神田秀夫教授記念号)，Vol. 12，No. 2，217-247.

羽柴優・上村真仁・山崎寿一・田川美那海（2018）．石垣島における移住の地区別実態とその背景に関する考察．日本建築学会大会学術講演梗概集，69-70.

引地博之・青木俊明・大渕憲一（2009）．地域に対する愛着の形成機構―物理的環境と社会的環境の影響―．土

木学会論文集 D，Vol. 65，No. 2，101-110.
波照間永吉（1988）．八重山の御嶽信仰習俗覚書．沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要，Vol. 1，3-25.
平岡昭利・巣山聡・宮内久光編著（2014）．離島研究Ⅴ．青海社.
石垣市（2018）．石垣市農村環境計画.
石垣市総務部市史編集室（1994）．石垣市史各論編民俗 上下．石垣市.
石垣市総務部市史編集室（1988）．石垣市史資料編 近代 3 マラリア資料集成．石垣市.
石垣市総務部市史編集課（2011）．石垣島の風景と歴史.
石垣市米原入植 50 周年記念誌編集委員会（2002）．石垣市.
伊原間公民館編（1993）．伊原間村誌．石垣市伊原間公民館.
伊藤庸一（1985）．農村集落における空間認識に見られる領域性に関する研究．農村計画学会誌，Vol. 4，No. 1，16-28.
市川秀之（2001）．広場と村落空間の民俗学．岩田書院.
今里悟之（2006）．農山漁村の“空間分類”―景観の秩序を読む―．京都大学学術出版会.
石原昌家・安仁屋政昭（1978）．八重山諸島における開拓移住行政の推移と移住地の実態分析．沖縄国際大学，151-217.
鎌田誠史・浦山隆一・斎木崇人（2012）．八重山・石垣島の近・現代における村落空間の特徴と変遷に関する研究―村落空間構成の復元を通じて その 1―．日本建築学会計画系論文集，Vol. 77，No. 679，2073-2079.
国土交通省（2014）．新たな「国土のグランドデザイン」（骨子）．4.
観光庁（2018）．持続可能な観光推進本部の設置．http://www.mlit.go.jp/kankocho/topics08_000126.html.
記念誌編集委員会（1991）．川原入植五十周年記念誌．川原入植五十周年記念事業期成会.
牧野清（1972）．新八重山歴史．牧野清.
牧野清（1975）．登野城村の歴史と民俗．牧野清.
宮良村誌編集委員会（1986）．宮良村誌．宮良公民館.
Hidalgo, M. C. and Hernández, B. (2001). Place attachment: Conceptual and empirical questions. *Journal of Environmental Psychology*, Vol. 21, No. 3, 273-281.
Lewicka, M. (2005). Ways to make people active: The role of place attachment, cultural capital, and neighborhood ties. *Journal of Environmental Psychology*. Vol. 25, No. 3, 381-395.
名蔵入植 50 周年記念事業期成会（1999）．名蔵入植 50 周年記念誌―自由移民の歩み―．名蔵入植 50 周年記念事業期成会.
南山舎株式会社（2018）．八重山の豊年祭スケジュール 2018．https://yaimatime.com/special/hounensai2018/#q2.
農林水産省（2015）．農業集落カード.
柴田建（2015）．移住者の受け入れと地域継承の課題―移住ブームが続く沖縄・裏石垣からの報告―. 都市住宅学，Vol. 89，18-23.
重村力・山崎寿一（1991）．中久保集落の共同性の展開過程―共同性の空間構造―．日本建築学会計画系論文集，Vol. 424，101-108.
高口愛・西山徳明（2000）．伝統的景観管理とその変遷―竹富島集落における景観管理能力の発展条件に関する研究その 1―．日本建築学会計画系論文集，Vol. 538，133-140.
高橋誠一（2003）．琉球の都市と村落．関西大学出版部.
たけしょう（2019）．石垣島タウンガイド Vol. 21（改訂版）．たけしょう.
得能壽美（2009）．古文書に見える白保村．白保村ゆらてぃく憲章推進委員会.
特定非営利活動法人 夏花・白保村ゆらてぃく憲章推進委員会（2015）．白保公民館指定文化財ガイドブック.
浮田典良（1974．八重山諸島における遠距離通耕．地理学評論，Vol. 47，No. 8，511-524.
山崎寿一・重村力（1993）．中久保集落における集落域の土地利用と土地割形式―共同性の空間構造―．日本建築学会計画系論文集，Vol. 443，133-141.
米原入植 50 周年記念誌　開拓の魂．米原公民館.

Abstract

Given the recent increase in tourism to Ishigaki Island, it has become increasingly important to maintain a balance between economic, environmental and social concerns in order to ensure sustainable development. However, it is difficult to capture the feature of local community and reflect it on plans. It has been found that part of characteristics of local community is represented by spatial perception. The purpose of this paper is to clarify how people of Ishigaki Island perceive their local area, in particular living spaces, especially focusing on their perception of the boundaries and centers of their villages, which are considered the basic elements of spatial perception. As villages on Ishigaki Island have various characteristics, we selected 7 villages with different features from approximately 40 villages in existence and considered how factors such as history, major means of livelihood or community events influenced spatial perception. As a result, we identified two key phenomena: (1) The elements which effect spatial perception of an area can be classified into 5 types (topography, residential area, land usage, religion and the relationship with surrounding villages). (2) People tend to recognize the place where residents gather or manage community events as the center of their village.

（受稿：2019 年 4 月 15 日　受理：2019 年 7 月 29 日）